

中世後期の地震と年代記

矢田 俊文

一 はじめに

本稿の目的は、地震史研究のために中世後期の地震記事が記載される年代記の史料性格を検討することにある。

田良島哲氏は、歴史地震研究においては、政治史・社会史のための記録・文書とは異なる年代記などの史料群を取り扱わねばならないこと、年代記の記事の信頼性を評価するには原年代記の検討が必要であることを指摘する⁽¹⁾。また、笹本正治氏は、中世の歴史地震記事を確定するために日蓮宗僧日国とその法脈を中心とする甲斐常在寺（現、山梨県富士河口湖町）の衆が書き続けた『妙法寺記』と十八世紀後半にまとめられた信濃佐岡辺（現、長野県下伊那郡天龍村坂部）の熊谷家の伝記である『熊谷記伝記』を検討し、『妙法寺記』の文正元年（一四六六）以前と『熊谷記伝記』の中世の記事は、他の記録等を前提にその地域とは関係のない記事を織り込んでいるとする⁽²⁾。

以前私は、既刊の地震史料集で使用されている『越後年代記』⁽³⁾について検討したことがある。『越後年代記』は、日本書紀、続日本紀、扶桑略記、

元享釈書、太平記、薩戒記、康富記、廻国雜記、北越太平記、承久記、吾妻鑑、北越軍記などの既刊文献を使つて慶応二年（一八六六）に紀興之が編纂した年代記であり、『越後年代記』を使用するのであれば、紀興之が使つたものと史料にまで遡つて検討しなければならないと述べた⁽⁴⁾。

地震史研究にとつて年代記の活用は欠かせないが、年代記はその史料の性格を明確にすることなしに利用することは危険である。本稿では「重撰倭漢皇統編年合運図」などいくつかの年代記の地震・噴火の記事を検討することによつて、年代記がもつ特有の性格を検討する。そのことを通じて、中世後期の地震史研究を進展させたい。

二 年代記の記事と出典

各地には多くの年代記が伝来している。また年代記には「重撰倭漢皇統編年合運図」のように近世初期に印刷され流布したものもある。本章では、年代記がいかなる史料に依拠して作成されたのかについて検討する。はじめに年代記の一つとして知られ、近世初期に出版された「重撰倭漢皇統編年合運図」を対象として、年代記の記事とその出典を考える。

国立公文書館内閣文庫所蔵の古活字版年代記「重撰倭漢皇統編年合運図」には、次のような地震・火山の記事がみえる。以下に掲げたものは、一三六一年以後の地震・火山記事である。この「重撰倭漢皇統編年合運図」⁽⁵⁾は、慶長八年（一六〇三）まで記事が印刷されているもので、それ以後は手書きで書き込まれている。編纂物とはいえ、慶長八年頃に編まれたものであり、地震史料としては重要である。

(史料1)

康安元

六廿二大雪降、極寒如冬、七廿四難波浦數百町水枯、又大雪如山、三晦京城八十六町炎、○防州海中出鼓、大過廿丈

応永九

春彗星出、夏大旱、秋洪水大風、冬地震

応永十一

正廿一、下野国那須地獄焼出

応永十三

春天下飢、秋洪水大風、冬十一朔、大地震

応永十四

正五、大地震

文安五

水災、地震、疾疫、飢饉

宝徳元

自四月數日大地震

康正元

十二、晦夜大地震

文正元

十二廿九、大地震

明応三

五七、大地震

明応七

六十一、諸州大地震

永正七

八七、大地震

永正九

六月、大地震

天文二十三

自五月白山焼出

天正十二

明年十一廿九、大地震逾年不止

慶長元

天下大霾、閏七十二、^ミ人地震、^ミ逾月不止、○京師・畿内・關東諸国、降毛長四、五寸

右の「重撰倭漢皇統編年合運図」の記事のうちから、南海トラフ周辺で起ったマグニチュード8以上の巨大地震の記事を見てみよう。南海トラフ周辺の巨大地震は、中世後期には一三六一年（康安元）と一四九八年（明応七）の二度起こっている。「重撰倭漢皇統編年合運図」には、明応七年八

月二十五日に南海トラフ周辺で起った巨大地震である明応地震の記述はない。同年六月十一日に「諸州大地震」とあるが、これは明応七年八月二十五日とは別の地震である。「重撰倭漢皇統編年合運図」には、東海地域に津波等の大被害をもたらした明応地震の記事は記されていないのである。

一三六一年の巨大地震については他の地震記事よりも多くの記載がある。七月二十四日、難波浦では數百町水が枯れ、防州海中には二十丈を超える大きな鼓が出現したとある。また、大雪山の如しとある。この記事は何にもとづくものであろうか。

次の史料は、古態本の「西源院本太平記」第三十六卷⁽⁵⁾である。

(史料2)

一、大地震^井所々怪異四天王寺金堂顛倒事

同元年六月十八日之巳刻ヨリ、同十月比二至ルマテ、大地ヲヒタ、シク動テ、日々夜々止ム時ナシ、(中略)七月廿四日ニハ撰津国難波浦ノ奥、數百町半時計乾キアカリテ、無量之魚共沙ノ上ニ^{イカ}吻ケル程ニ、当リノ浦ノ海士共、網ヲ卷鉤ヲ棄テ、我劣シト拾ケル処ニ、又俄ニ大雪山之如クナル潮満来テ、漫々タル海ニ成ケレハ、數百人ノ海人共独モ生テ帰ルハ無リケリ、亦周防之鳴戸俄ニ潮去テ陸トナル、高ク峙タル岩ノ上ニ、筒ノマハリ廿丈計ナル大鼓ノ、銀ノヒヤウシケク打テ、面ニハトモ絵ヲ書、題ニハ八龍ヲ^{ヒコウ}拏ハセタル顛レ出タリ、

史料2には、七月二十四日に撰津国難波浦ノ沖が數百町半時ほど干上がつたこと、また、大雪山のような津波が到来したこと、さらに、周防の鳴門が干上がり高くそびえ立つ岩の上に、筒の周り二十丈ほどの大鼓が顛わ

れたことが記されている。これは、「重撰倭漢皇統編年合運図」の七月二十四日、難波浦では数百町水が枯れ、防州海中には二十丈を超える大きな鼓が出現したという記事と同じである。「重撰倭漢皇統編年合運図」の典拠の一つが『西源院本太平記』等の古態本太平記であることは確実である⁷⁾。

一三六一年の巨大地震は、難波浦など畿内に大きな津波被害をもたらした。「重撰倭漢皇統編年合運図」は、畿内の地震津波被害には注目して記事を書いているが、東海地方に大きな被害をもたらした明応七年八月二十五日の記事は載せていない。その一方で、同年六月十一日の地震記事は掲載している。

明応七年六月十一日の地震は、『後法興院記』『御湯殿上日記』『言国卿記』『実隆公記』『大乘院寺社雜事記』の同日条に地震があったことを記している⁸⁾。『後法興院記』には「申刻大地震」と記される。明応七年八月二十五日の南海トラフ周辺で起こった地震は、京都・奈良でも感じ、『後法興院記』『御湯殿上日記』『言国卿記』『実隆公記』『大乘院寺社雜事記』にも地震の記事があり、『後法興院記』には、「辰時大地震、去六月十一日地震一陪事也」と記される。八月二十五日の地震は、『後法興院記』に六月十一日の二倍もの揺れを感じたと記される大地震であったが、「重撰倭漢皇統編年合運図」の明応七年の項には八月二十五日の地震は記されず、記された地震は六月十一日の地震であった。

以上、「重撰倭漢皇統編年合運図」の中世後期の地震記事のうち南海トラフ周辺で起こった一三六一年と一四九八年の二つの巨大地震の記事を検討した。その結果、一三六一年の地震については、古態本太平記に依拠して記事が書かれていることがわかった。また、一四九八年については、東海地方等に大きな被害をもたらした八月二十五日の地震ではなく、それよりも京都でも揺れが小さい六月十一日の地震が選択されて記されていること

がわかった。「重撰倭漢皇統編年合運図」は、慶長八年頃に編まれたものであり、地震の研究史料としては重要な史料であるが、中世後期に日本列島に大被害をもたらした重大な地震について書き込まれた史料ではないことは明らかである。

三 年代記と地震記事

二で検討した「重撰倭漢皇統編年合運図」は、中世後期に日本列島に大被害をもたらした重大な地震が書き込まれた史料ではないことがわかった。それはなぜなのか。近世の中期・後期に成立した年代記ではなく、それよりも早い時期の慶長八年に作成された年代記であるから、年代記としては良質なものと考えてもよいように思えるが、一三六一年、一四九八年の南海トラフ周辺で起こった巨大地震情報も編纂者の体験にもとづくものではなく、太平記などなんらかの著作物をまとめたもので、同時代の日記等に記された地震記事とは異なる。

年代記に記された記事のなかでも、その年代記が記された時期よりもはるか以前の記事を地震史料として使用する時は、相当慎重に取り扱わねばならないのである。このことをあらためて近世中期に作成された年代記で確認しよう。検討する年代記は、石巻市真野の加納家の年代記⁹⁾である。

難波信雄氏¹⁰⁾は、「加納家年代記」の序文と記述内容から、根幹部分は天明四年（一七八四）に成立したと推定されている。次に加納家の年代記（以下、「加納家年代記」）の中世後期の地震・噴火記事を掲げる。

（史料3）

七月廿日難波浦水涸ル事数百丁、周防海中鼓出、大サ過二十丈過(中略) 同九壬午は、き星出ル、夏大日照、秋洪水大風、冬地震、同十一甲申正月下野国那須焼、(中略) 同十三丙戌天下飢饉、秋洪水大風、冬十一月朔日大地震、同十四丁亥正月五日地震(中略) 同四壬子九月十六日地震、同五戊辰、水災・地震・疾疫并飢饉、宝徳元己巳四月、数日大地震、康正元乙亥三月晦日大地震(中略) 霜月廿三日夜大津波(中略) 文正元丙戌十二月廿九日大地震、(中略) 同三甲寅五月七日地震、同四乙卯鎌倉地震、同七戊午六月十一日諸国大地震(中略) 同七庚午八月七日地震(中略) 十月廿九日地震、(中略) 慶長元丙申天下土降、閏七月十二日地震、月ヲ越テ不止、諸国毛降、長四、五寸位

これらの記事と史料1「重撰倭漢皇統編年合運図」を比べると、多くが同じ記事であることがわかる。一で検討した一三六一年と一四九八年の地震記事をあらためて比較してみよう。

史料1には、一三六一年の地震記事は「七廿四難波浦数百町水枯、又大雪如山、○防州海中出鼓、大過廿丈」とあるのに対し、史料3では、「七月廿日難波浦水涸ル事数百丁、周防海中鼓出、大サ過二十丈タリ」とあり、同一記事であることがわかる。また、一四九八年の地震記事は、「明応七六十一、諸州大地震」とあるのに対し、史料3では、「七戊午六月十一日諸国大地震」とあり同じである。明らかに、史料3の多くは、史料1「重撰倭漢皇統編年合運図」と同系統の年代記①に基づいて記述されたものであることがわかる。

このように、近世中後期成立の年代記における中世後期の記事は、「重撰倭漢皇統編年合運図」など、すでに作成された年代記をもとに作られている。

るのである②。

したがって、本年代記のなかで信頼できる記事は、その年代記が作成された時期と近い時期の記事ということになる。以下では信頼できる地震記事が記される年代記を見ていこう。

まず、「生田本鎌倉大日記」③から始める。

(史料4)

(裏書)

九・十六・夜子尅、大地震、山崩、築地悉顛倒、夜中動事三十余度、惣其後廿ケ日計、昼夜動事数十度也、
五・廿一年尅、地震

右に掲げた史料4は、「生田本鎌倉大日記」永享五年条の裏に記載された地震記事である。臼井信義氏によれば、「生田本鎌倉大日記」は関東足利氏の末裔である喜連川家に伝来した年代記で、応永二十年代末頃に書かれ、それに永享十一年(一四三九)頃までに追筆が行われたものである④。本史料によると、永享五年(一四三三)五月二十一日と九月十六日に地震があった。特に九月十六日は「大地震」で、山崩れが起こり、その後、二十日間ほどで数十度揺れたとある。

東国の年代記で信頼できる年代記である「神明鏡」⑤には、どのように記されているのであろうか。康安元年以降の地震・噴火記事は、次のようなものである。

(史料5)

慶安 当年六月ヨリ十一月マテ旱シテ五穀モ悉枯、大地震モ日二、三度宛不止、江州湖モ三丈六尺干テ、様々ノ不思議アリ、

(定本)

同十五年正月十八日、野州那須山焼崩、同日硫黄空ヨリ降、常州那珂

河硫黄五、六年也、(中略) 同十七年庚寅正月廿一日又那須山焼崩、

麓里打埋、人百八十余打殺、牛馬其数ヲ知ラス、同日天鳴事夥、雷ノ

声ノ如ク、空ニハ雲ナシ、大島モ鳴動、勘状ニハ天狗動ト云ヘリ、

同廿三年九月九日、伊豆大島焼、(中略) 同八月十日、鎌倉大地震十

七度

(定本)

永享壬子三月十二戌時大地震、(中略) 同五年癸丑九月十六日、大地

震、鎌倉築地崩、極楽寺ノ塔ノ九輪落チ、惣シテ唐物共多損、大山ノ

二王ノ頸落、前代未聞也、同六年甲寅正月十六日大地震

「神明鏡」は南北朝期に一応成立し、その後何度か書き継いで室町初期

に完成した年代記で、最終記事は永享六年(一四三四)である(16)。さらに、

「神明鏡」は常陸佐竹氏周辺で生み出され書写されたものである(17)。

本史料により、応永十五年(一四〇八)と同十七年(一四一〇)に那須

山の噴火、応永二十三年(一四一六)に伊豆大嶋が焼けたことがわかる(18)。

さらに、応永二十七年(一四二〇)の鎌倉の地震、永享四年(一四三二)・

永享五年(一四三三)・六年(一四三四)の地震があったことがわかる。永

享五年九月十六日の地震は、「生田本鎌倉大日記」にも記されていた地震である。

常陸佐竹氏周辺には、ほかに「東州雜記」(19)という年代記がある。以下「東州雜記」所収の地震・噴火記事を掲げる。

(史料6)

(定本)

同十五年正月十八日、野州那須山焼崩、同日ニ空ヨリ硫黄降、常州那

珂川硫黄ニ成事五、六年也、同十七年庚寅正月廿一日那須山焼崩、麓

里打埋人百八十余、打殺サル牛馬不知数、同日天鳴事夥シ、空ニハ雲

ナシ、伊豆大嶋モ鳴、勘状ニハ天狗動ト云ヘリ、

同八月十日、鎌倉大地震十七度、

延徳元年四月大地震

同六年正月廿六日大地震

本史料は、山本隆志氏によると、佐竹旧記に収められる一種の年代記で、

記事は貞治三年(一三六四)から天正五年(一五七七)に及ぶ。もと佐竹

氏の菩提寺の一つ清音寺所蔵のもので、佐竹氏に関係の深い寺院の年

代記と考えられ、自然災害に関わる記事も多いとする(20)。山本氏の本史料

の解説はこれだけである。

「東州雜記」は、貞治三年(一三六四)の記事から始まるので、貞治三

年以後の「神明鏡」の記事と比較してみよう。史料5「神明鏡」と史料6

「東州雜記」を比べるとわかるように、応永十五年、同十七年、同二十七

年の記事は同じであることがわかる。すなわち、応永二十八年までの「東

州雜記」の記事は「神明鏡」に依拠して書かれている。このことから、「東

州雜記」は「神明鏡」を参考にして作成された年代記であることが確認できる。

四 おわりに

以上、「重撰倭漢皇統編年合運図」「加納家年代記」「生田本鎌倉大日記」「神明鏡」「東州雜記」の地震・噴火記事について検討した。その結果、本稿で明らかになったことは、次の三点である。

1、「重撰倭漢皇統編年合運図」の中世後期の地震記事のうち南海トラフ周辺で起こった一三六一年と一四九八年の二つの巨大地震の記載を検討した。その結果、一三六一年の地震については、古態本太平記に依拠して記事が書かれている。また、一四九八年については、東海地方等に大きな被害をもたらした七月二十五日の地震ではなく、京都でも揺れが小さい六月十一日の地震が選択され記されている。

2、「加納家年代記」の中世後期の記事の多くは、「重撰倭漢皇統編年合運図」系統の年代記に依拠して書かれている。

3、「東州雜記」の応永二十七年までの地震・噴火記事は、「神明鏡」に依拠して書かれている。

中世後期の地震には、享徳三年（一四五四）三月十一日の奥州地震津波（3）、明応四年（一四九五）八月十五日鎌倉地震津波（3）など、地震史を考えるうえで重要な地震がある。これらの地震は、年代記を研究することなしにはその性格が明確にはできない地震である。東北・東国・九州で起こった地震は、京都・奈良の信頼できる日記・記録では地震の性格は把握できず、年代記の研究が必要である。

本稿で検討した年代記は、年代記のうちの一部ではない。地震史研究を深めるために、さらに年代記研究を進める必要がある。

註

（1）田良島哲「地震史料データベースにおける史料学的課題——中世の年代記を中心に——『月刊地球』三一七号、二〇〇五年

（2）笹本正治「中世地震史料の問題点」『月刊地球』三一七号、二〇〇五年

（3）『越後年代記』は、正確には『新撰越後国年代記』という。全文翻刻は、矢田俊文・相沢 央編『新撰越後国年代記』（新潟大学大域プロジェクト研究資料叢刊Ⅳ）、新潟大学、二〇〇五年

（4）矢田俊文「既刊地震史料集の校訂の諸問題」『月刊地球』三一七号、二〇〇五年、のち矢田俊文『地震と中世の流通』高志書院、二〇一〇年に所収

（5）「重撰倭漢皇統編年合運図」については、湯谷祐三「要法寺円智日性による『倭漢皇統編年合運図』と『太平記鈔』の刊行」『名古屋外国語大学外国語学部紀要』四〇号、二〇一一年、朝倉治彦「要法寺版『和漢合運』素描」『國學院大學近世文学会会報』一五号、二〇〇九年が詳しい。湯谷氏は、大永二年（一五二二）が蓬左文庫本『倭漢皇統編年合運図』の底本の書写年次に近いとする。

（6）鷲尾順敬校訂『西源院本太平記』刀江書院、一九三六年

（7）本稿では「重撰倭漢皇統編年合運図」の一三六一年地震の記事の根拠は古態本太平記であるといっているのであって、一三六一年地震がなかったといっているのではない。この地震による難波浦の津波被害は、『嘉元記』で確認できる（矢田俊文「地震被害と摂津天王寺西浦・遠江中部低地」『中世考古学文献研究会会報』八号、二〇〇七年、のち矢田俊文前掲『地震と中世の流通』に所収）。

（8）「古代・中世」地震・噴火史料データベース（β版）。以下、本稿

で出典を記さないものは、私も作成に加わった「古代・中世」地震・噴火史料データベース(β版)に拠っている。

(9)『石巻市史』第一巻通史編(上)、石巻市、一九九六年。史料3「加納家年代記」は応安元年条に「三六一年の地震記事を記すが、「康安」の誤りである。

(10)難波信雄「解題」『大水記・水損難波大平記・洪水心得方・享保十七壬子大変記・年代記・凶年遺作日記・附録』(日本農書全集六七 災害と復興二)農山漁村文化協会、一九九八年

(11)「重撰倭漢皇統編年合運図」と同系統の年代記には、吉田光由編の「指掌倭漢皇統編年合運図」がある。本史料は、早稲田大学古典籍データベースでみることができる。

本稿では、「加納家年代記」慶長元年閏七月十二日条までのうち、元龜元年十月五日・天正三年十一月十六日・天正七年三月二十三日、天正十年二月十四日、天正十三年八月二十八日の津波と噴火と思われる記事を省略している。「加納家年代記」がいかなる年代記・記録等に依拠して作成されたものであるかについては別に検討しなければならない課題である。

(12)「重撰倭漢皇統編年合運図」を利用して作成された年代記としては、ほかに小瀬甫庵『年代紀略』がある。柳沢昌紀氏(小瀬甫庵にとっての歴史―『年代紀略』と『信長記』『太閤記』―『日本文学』五九、二〇一〇年)は、『年代紀略』の記事は、ほとんどが「重撰倭漢皇統編年合運図」と同じであるが、天正十三年と慶長元年の地震の増補記事は改訂者の生々しい見聞の記憶にかかるものであろうとする。天正十三年の増補記事は、「越中木船城沈入、人多死」、慶長元年の増補記事は、「五畿内人多死」である。なお、『年代紀略』の国立国会図書館本と京都大

学谷村文庫本の慶長十七年 古活字版は、国立国会図書館デジタル化資料・京都大学電子図書館でみることができる。

(13)『鎌倉大日記』(神奈川県史編集資料集 第4集)、一九七二年、神奈川県企画調査部県史編集室

(14)臼井信義「鎌倉大日記について」『歴史地理』八四―二、一九五三年

(15)『続群書類従』二十九上。中世後期の地震・噴火記事については、「永禄七年甲子正月十九日、於常州佐竹太田求之、奥州揚津之住僧治部卿」という奥書を有する東京大学史料編纂所所蔵裏松本神明鏡とそれほど違いはないので、本稿では群書類従本を使用する。裏松本神明鏡については、藤原重雄氏(裏松本「神明鏡」の書写にみる戦国期東国文化)『古文書研究』五九、二〇〇四年)の紹介がある。

(16)加美 宏「神明鏡」『日本古典文学大辞典』第三卷、一九八四年
(17)佐々木紀一「神明鏡」伝本の整理と成立について(上)『国語国文』六九―一、二〇〇〇年、佐々木紀一「神明鏡」伝本の整理と成立について(下)『国語国文』六九―二、二〇〇〇年

(18)「神明鏡」は、火山噴火の基礎史料としても知られている(大森房吉『震災予防調査会報告』八六号(日本噴火志 上編)、一九一八年、山元孝広・伴 雅雄『那須火山地質図』通商産業省工業技術院地質調査所、一九九七年)。

(19)『喜連川町史 第二巻 資料編2 古代・中世』喜連川町、二〇〇一年

(20)山本隆志「資料解説」『喜連川町史 第二巻 資料編2 古代・中世』喜連川町、二〇〇一年

(21) この地震については、保立道久「貞観津波と大地動乱の九世紀」(『季刊東北学』二八号、二〇一一年)が重要である。

(22) この地震については、金子浩之「宇佐美遺跡検出の津波堆積物と明応四年地震・津波の再評価」(『伊東の今・昔 伊東市史研究』一〇号、二〇一一年)が重要である。本論文については西山昭仁氏にご教示いただいた。